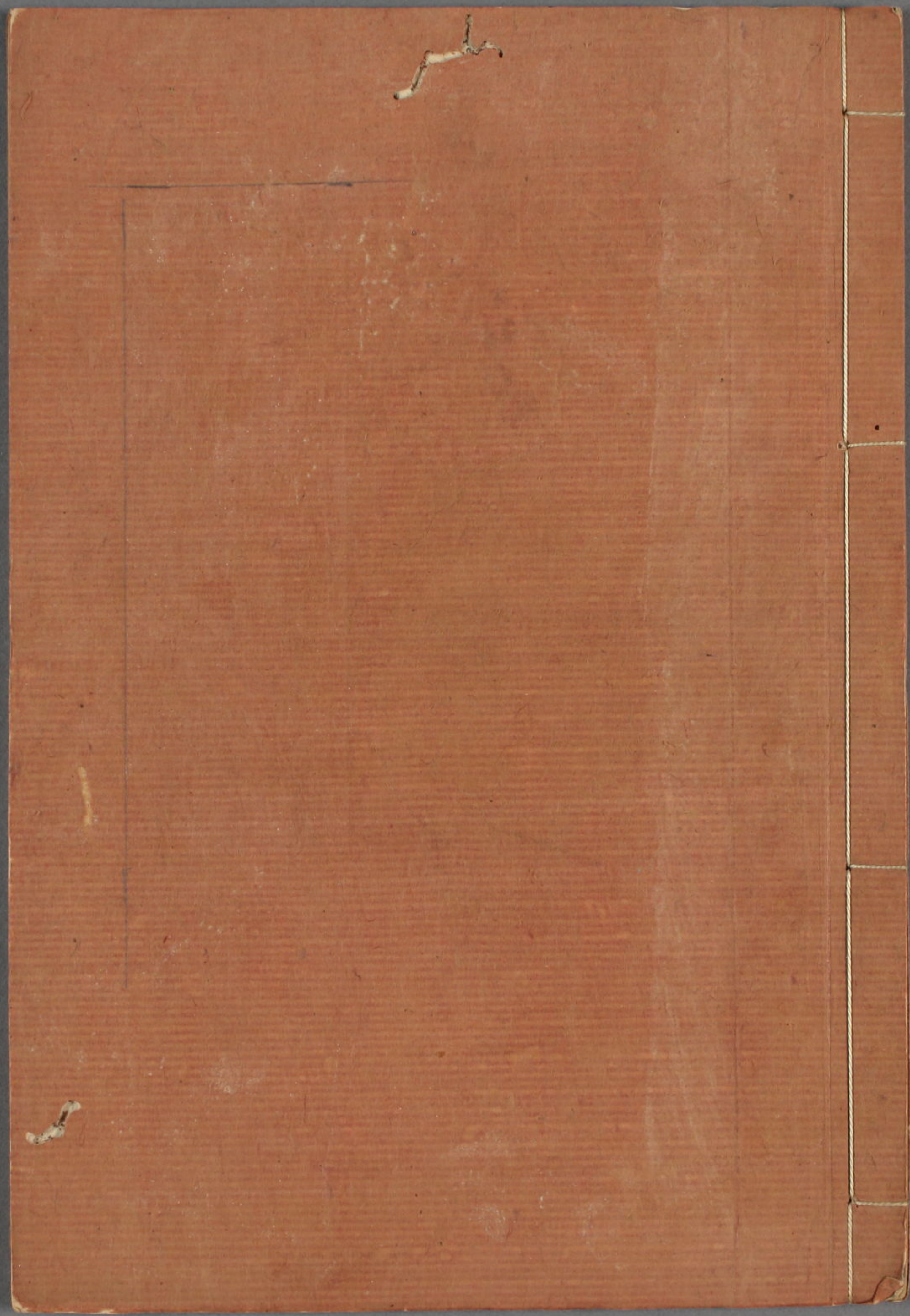
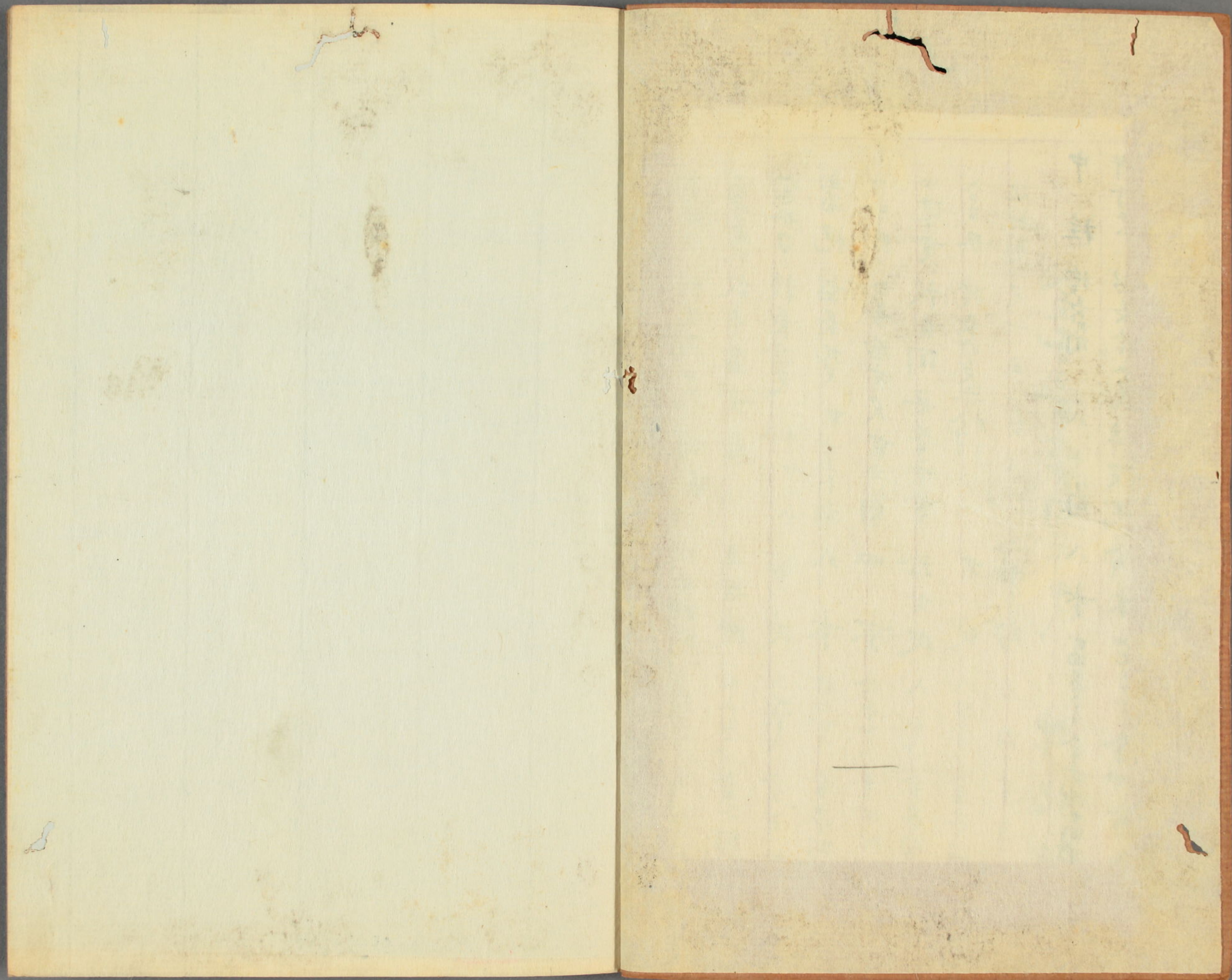






秘注源氏物語七部集巻之二



ま乃日のまに

晴るんと人との戸抄きあひて春風の方り
けぬ海へ海へくきりしまねの方もえん
海へつともまのまに五つ枝折をけり
進まよまよけりまのまをと思ひあけり

一年の年の晴るまのまにまのまにまのまに
まのまにまのまにまのまにまのまに

まのまにまのまにまのまにまのまに

まのまにまのまにまのまにまのまに
まのまにまのまにまのまにまのまに

早稲田大学
文学部図書

4510478

イタミくろりり是より一帯ノ移也

文王の母よりしも之はて

李氏

大に姓なり希ノ角ヲ音常ノ角トナシ洞ヲ味ト改トナシタリ周ノ文王基ヲ建ルニ人ヲ招カサレトモ其姓ヲ仰キ民ヲ服スルヲ城郭セリ

あるを乃 角の なき 州

西州

文王の母よりナリる五日ノ辰 靡ニ其穀を以テ角ノナキ州トハ地をなぐ移相ノ邪ナニナラシムナリ

然るくつなハ省なむくせよ 荷子

前々就任ニヤクモ後ト見テ記志ヲ改タリ省ヲホトクトハ居レテは異ナトイフナリ

依城郭をうくは 五 明 昌圭

記志をみん人ノミタニ依城をみナト産タレト人見セシト陽ニ修ナリヘリ但如キニ有明トヒセタリ

音けふ後リ人のうけ梅 雨相

乃修タスル部屋ト改タリ五明ニ音ナクハ其客ノ内ナラ後ニ移ス余情モアリ

ワヤくくわに神をくく星 重五

神を改シタリ人ノ新ト言ナリワヤくくと大略ヲヒカセタリ

も居くく半をわくの砂れて 昌圭

後附三十二句一帯也

むふ上男の残をあらうし 李氏

弟夕ニ夕一葉一陽ケあ又ハ陽モロウニ夕ニ夕一葉一

柳もき陽そこくは物うきや 重五

ニ夕一葉ト云々故ニ秋秋陽ヲ厭ス休タリ但長男ノ
言語ヨリ子供ノ人ハ詞ヲ迷タリハハ必竟鳥居ノ
句ニ附タルト曰希之ニ夕ヲニ夕ニ可見

へくくく日リ陽ソヤくく 荷子

柳み餘の影を葉入りの夕タヤサハ句ヲ可見

うろくくとあろくくあまは遠海で 紫風

ハカハ日ニ遠海ト心ノセカル、伴ハ更ニ急クト言ニウツ
カリトヒ、キタリ香ノ後ウカヨシ

只 情り 樟 ちくくわり 雨桐

まろくくとまあ柳ニ樟ヲ強向シウツカリト言ニウツ
ルトヒ、キ

思ひをたなわの 柳ニ切あー 荷子

伴ヲ少人ニ定タリ但別シシ更ノウツサヤ

いとくくくく 小佐の針主 昌幸

操者ニテ男ニ情タリイトモカシコキト云詞ハを忍
タキト言詞ナリ

木の末り窓目、門ハうつむきて 雨桐

高俊の針主ヲ窓目ニ見エ遠来ニ針主ハ松ノ木ト
カケテイトモカシコキト言ニウツムキハヒ、キナリ

くくくーの針もくくくく 時あや 重五

門ノウツキタルイフヲ言居ノオトミテ時々ノ海一サヲ
今新ニタリハタレノ新ノミヨトハタレノ時々ノ海一サヲ
門内ノ敷石ノ上ヲモミルヘシ

新良ト云腐成ヤチノミヨトハタレノ時々ノ海一サヲ

前白ヲ云者ノ假トミテ附タリ時々ノ海一サヲ

新件ト云ヤチノミヨトハタレノ時々ノ海一サヲ

修ミツカウミ腐成ミタリ所レケルト言ミ表ミミキ
自次ノ存時ニ同心防ノ事ナルヘシ

徳和生ト云藏ミタリノ位ナリト

表トミタリ修ミテナレル事ノ表ミタリ
中修ミ修ミ可思望ノ破レタルミヨトハタレノ時々ノ海一サヲ

赤多ミと梅ノ名ミヨトハタレノ時々ノ海一サヲ

前白ノ人言ハ赤トミヨトハタレノ時々ノ海一サヲ

今ノ田赤ミヨトハタレノ時々ノ海一サヲ

且場ノ赤ナリ名ミヨトハタレノ時々ノ海一サヲ

新赤ミヨトハタレノ時々ノ海一サヲ

ニ白カラミ也今ノ情ニ直ミヨトハタレノ時々ノ海一サヲ

新赤ミヨトハタレノ時々ノ海一サヲ

赤白ノ赤ミヨトハタレノ時々ノ海一サヲ

新赤ミヨトハタレノ時々ノ海一サヲ

たとけトヤ海をうの波に留る市 紙人

浪泉山の入込ヨ波をうの波に留る市ト云釈ニタリ
紙人をセヨト云テトケシヤハニキ也波をうの波に留る市ト云釈ニタリ

四つ手人 伐くの眉の島 有号

前句ノ波をうの波に留る市ト云釈ニタリ
四つ手人ト云テトケシヤハニキ也波をうの波に留る市ト云釈ニタリ

もの耳も 軍の中ハ行わざに 羽生

四つ手人ト云テトケシヤハニキ也波をうの波に留る市ト云釈ニタリ

名も勝葉と 花くもや上 せう

二句一意ハ波に陣立ノ海を勝葉と云テトケシヤハニ
二句ノ波に陣立ノ海を勝葉と云テトケシヤハニ

大年ハ 花 葉

勝葉ト云テトケシヤハニキ也波をうの波に留る市ト云釈ニタリ
大年ハ 花 葉

もの 花 葉

二句一意ハ波に陣立ノ海を勝葉と云テトケシヤハニ

花 葉

ヨキ勝ト云テトケシヤハニキ也波をうの波に留る市ト云釈ニタリ
花 葉

花 葉

朝夕の詠^{更ニ} 暮ナカラクコト摘ミテ 邦人ニ表ノ格ニテ
早キカト自慢ニタル句ナリ

むく水 ちるるふちるるや 野水
登ノ格ニタル邦人ト贈ニテ 記シ附タリ 吾ノ格ト云ニ馬
細トハヒキナリ

こい 曉タリマシキコトノ月 且葉

一説カイトフニ 對ニテコトナリ 但コトハ是ハト云義也
但ニ句一説也 端々ノコト 故思 僅ニコト 四葉アリ 春ハ二月
十五日寅ノ時 曉来テ十六日午ノ時 隔ル余ハ略之

陽冬のもえ跡 光輝ナク 城人
前句ノ花ノ葉トシテ 陽冬ノモエ跡ニタルト 花ノ葉ノ末端
ニシテ 残リ居ルト 言冠 辭ニナシナリ

来る 神リ 一 春ノいふく 荷子

春ノ前ノ清カケノ姿 凡ヨリ 秋ノ後ノ花ニ 附タリ 長
春ノ者ヨリテ 祿ナト 陽タリトシテ 難ナリ 洞ノ春ノ
神ニハ 依リタリ

田を耕ふる 起ルる 又 和葉

前句ノ 物 耕ふる 俤ヨリ 田ヲ 耕ノ 五文ニ 云々 和葉
ナリ 又 心ヲ 花見ニ 里ニ 生シケリト 作りタリ 花見ノ 語ニ 云々
頂ニ 云々 白也

カ の 和を はり 中の子 野水

前句ニ 和を はり 又 中ノ子 又 和を はり 又 中ノ子 又 和を はり
人情ヲ 述タリ 和を はり 又 中ノ子 又 和を はり 又 中ノ子 又 和を はり

連 濟 や 三升の 末の 和 且葉

カノ 和ト 云々 三升ノ 末ノ 和ト 云々 且葉
シキ 一ノ 思ヒ 云々 三升ノ 末ノ 和ト 云々 且葉

る 佐のうや 高のー山ー 誠人

東寺に大いなる高僧の祠にツナキ述句トハナレタリ

二月十六日旦暮の田家よと海つて

蛙のこすくやー 子 柿そや 野あ

句まハ蛙のあゝ何をあらう 柿そよハ 子 柿そやハモテハ
ヤスレ言フ也 暇をいふにすう面白ト且旦暮を對シテ野
水口接接之但エキト言フ色を以てモテハヤスレニ忌
フニイヒシキト四ニチカフト言フ

歌 あゝゝゝ 子 高の 旦暮

世水口接接ヲ受テ旦暮カ早下ニ先賜也 蛙の句ノ後リ
子サメニ歌ト言フチ添タリ

藤堂の 思ふの 思ふの 誠人

奥

碧泉ト見テ世群ヲ附タリ 岩水ハ何處ニテ雲丹ト言
物ト同シ故云ふ也 此階方後附ニテカウミカヤ也

よりー 人 瓜入るるの子 荷子

長場ニテテ

まてゝ 糸 海ーの 舟の 月 けり 文

糸をこねてる子 舟に糸入りまてゝ糸 月 舟の月 舟に
ヒキタリ 但馬ハ何處所定ハズキミテモ舟ニ糸ハ
至テ静カキ也 子 人 月 見ハト言ヨリ舟ニ糸入
所妙也

芦の穂をする 糸 の 端 穂

ニカウラミテ糸トカタリまて糸ト言ニ今ノ形容月氣
出まサノ穂ノ後リ也

磯 岸の 穂 穂 旦暮

前句二句一事也トニタル故ニ又水色ヲ添タリ但海辺ニ橘
シタリ芦ノ穂ノ出並テ海老ヲ備ノ立並テ居ル葉抄
実セリ但今ニ集ルハヒキ也

岩乃間より 龍丸なる 里 世々

ニカサミタル隙之隙ニ岩ノ指ヲセカキノ施ミハ蔵ヲ持
タル人トシテ其場ヲ定メタリ

雨の日は 親 懐中 人 懐中 荷子

前句ハ通リニ之等タル所ニテ親懐中ノ氣ヲ添タリ
ロメ高ト云ハ尾此ハ何物ノ由中ニミカサミテ水親ヲ
懐中ナリ

心より 懐中 人 懐中 人

前句ハ人ノ懐中ノ心ニカサミテ懐中ノ人トシテ心ニ
キノ心ニテ其心トシト言ハナリ

身より 懐中 人 懐中 人

前句ハ諸脈ニヒモシキトアラハ上品ノ人ナラニヒタルキト
ハ下級ノ人トシテ同心懐中ニ一飯ヲ食ント身名ニ折
アク留ミ也ト言解ナリ

身より 懐中 人 懐中 人

後句ハ心ハアタリヲ見ミタルニ後室ノ心ハ松ノ
心トシテ心ヲ養ミノ心ハ又ミタル心トシテ
解ミタル心トシテ心ハ又ミタル心トシテ

心ハ又ミタル心トシテ心ハ又ミタル心トシテ

心ハ又ミタル心トシテ心ハ又ミタル心トシテ

心ハ又ミタル心トシテ心ハ又ミタル心トシテ

心ハ又ミタル心トシテ心ハ又ミタル心トシテ

秋は和なり ？ 承 順 具 蒙

其分ト云詞ト書て深ノ順カ和名抄ニ第知ノ其
類ヲ書分先ニ標タリ是ラフ旨トモ書カレタル
詞又移レ也

初丁の移ヨラフ火を移ぬ 冬文

此口國ノ移ナカラ前クハ物寂タル作ヨ火ヲ移ぬと
云カリタルヲ標タリ但火チハ高美ノ人モ移ラフ之
目也其ノ移移ノ故事モアリ

別 の月 潤 あ 荷 子

旅人ノ移受ニ標ナサト香林ハ作レテ云ニ旅人ノ飯
堂傳信ノ別ヲ思ヒ書テ其誠ノ心ナキヲ言レテ
後アラハセト云レタリ

此の移ビの言ナラハ 唐 傳 是 具 蒙

前クヲ移ミヨ書人ノ詞トシテ思ノ香山ニ日教ニ并
寺ナト一行別ニ陳ナシタリ但此ノ花ハ此ノ都
花卷ノ都ト云ニ之四ノ言ハ一都ト云ノ同ニテ
此教ニ并寺ニ登ニ道也唐傳ハ思賢ノ學也

ま 乃 乃 の 移 也 む 乃 乃 乃 乃

前クノ移受作ヲレタリ此ノ移ニ書ムナラハ
トモ書ナラハ唐傳ハ此ノ移ニテノ白ニ

永 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

曉者ノ移ミナニ此ノ移ニ心ニ在ナラハ作ナラハ永乃日ノ
一乃ト云ナリ道ノ字ニ永乃ト云ナリ白ニ

美 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

美乃日ノ永乃ニ移ニタル傳ニヨシと知ル日ト思フ還
展ヲ五月而ニ移ニタル也美乃子乃トハ此ノ移ノ

金華山を蘭ニテ一夜に生る草也

銀鵲の乳ハあつて糸の形く 此草

ふ月をノツレくは能く人ノ銀鵲ニ思ひ寄る
銀鵲ハ利久ノ草通ノ物ハ銀鵲ノ心ニテ果
又カ改事ヲ念ミ并ニナクハ伯夷カ賢ヲ念ミ
タラシ前句ノ蘭ハ銀鵲カ落次ノ蘭ナリ

まねのもしよあつて 冬文

前句草花ニ名を人ヲ長節ノフヲ云々まねのまね
加エタ 物方ヨシ但ホツナクト云ヒソカニトヒキ

流るる草押あつて 秋人

前句草花用ヲ附タリ但當リ要ノ節ヲ思ヘシ

若 若くしの 且葉

此ノ草花之語ヲ云々 併ヨリ思若クニ思ハレモヤ
服カ

むきなりは 冬文

流るる銀鵲之ムサホリニキヌキル人信信云アリ

正ニねも 秋人

前句ノ人ノ歡喜ニ名ヲ附タリ但は前ノ二ねモノモ
字ハ帛ニアタリタレモノ字ニアラス正ノねノモノ
字也庵ノタニニハ是ハ其カ有テノ也

ねの 且葉

電ノ葉園ト琳タリ風流ノ句タレハ其ハ其ノ字ニ
併ノ字ニテ教ヒツル心ナリ

若 若くしの 若く

くまの川 鳴る 音 之 あり

山の花は 春 初 二 遠く 見 上 たり 傳 言 へ ち 雲 霧 下 たり

ト、ノ、云、は、春、初、に、遠く、見、上、たり、傳、言、へ、ち、雲、霧、下、たり

極 注 渺 海 七 部 系 卷 二

春の日の光に

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or ledger. The text is arranged in vertical columns and includes a circular mark in the upper left section.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or ledger.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or ledger.

